

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者：90代 男性 要介護5

病名：認知症、誤嚥性肺炎、進行性胃がんで噴門部狭窄、

多発性転移性肝がん、

廃用症候群、鉄欠乏性貧血、陳旧性橋梗塞、第二腰椎圧迫骨折

利用サービス：入所

経過：当施設入所中（令和7年7月から）に黒色嘔吐あり。胃がんがベースにあるため腫瘍細胞の崩壊による出血と判断され令和7年10月転院となった。同年12月上旬に急性期病院より「点滴無しで1週間」との余命宣告を受け、当施設での看取り希望で再入所された。

内 容

前院にて40日以上絶食期間が続き「点滴なしで1週間」との余命宣告を受けていた。

最期は当施設で過ごしたいとのご本人希望により、『基本絶食』『お楽しみ程度のおやつ提供』の方針で再入所となった。

笑顔が見られず、転院前より体重は10kg減少していた。

経口摂取されていないことから、口腔乾燥著明で、乾燥した痰が口腔粘膜に固着し強い口臭が認められる状態であったため、直ぐに歯科衛生士による口腔ケアを行い、口腔環境が改善された。それにより発語と表情を取り戻し、ご家族と笑顔での写真撮影ができた。

入所後の絶食期間中にも「冷たい水が飲みたい」と飲水を希望され、安全に飲水していただくためのトロミや姿勢などを嚥下チームを中心に検討しスタッフで共有、希望に沿って提供できる環境を整えました。

「ご飯が食べたいなあ」と意欲が強く、ご家族に食事に近い間食の提供を依頼し、召し上がっていただくプランを立てた。

胃がんによる噴門部の狭窄の影響で嘔吐のリスクがあり

「みんなと同じ食事がしたい」「お肉が食べたい」等の強い希望に娘様の協力を得て対応。

治まることのない食思。主治医に相談し食事の提供を検討することとなった。

急性期病院で絶食の判断に、食事を開始することに対してはスタッフからの賛否はあったが、本人の強

い希望から、姿勢や食形態、ペーシング、自助具等を評価したうえで3食提供開始となった。

年末にはご家族が持参されたカニを嬉しそうに召し上がる姿にご家族同様にスタッフも嬉しく笑顔となりました。

ご本人の食べる意欲に寄り添った介入により、余命1週間との宣告後も、元気に食べて新年を迎える事ができた事例